

詩同人誌評

第7回

不可能なるものを 夢みる権利

中塚 鞠子

新しい年を迎えたが、コロナも収まらず、ロシアのウクライナへの攻撃も止まない。プーチンの暴挙を少しでも理解できるかと、昨年、大佛次郎論壇賞を受賞した板橋拓己『分断の克服』を読んだ。一九八九年―一九九〇年、ドイツ統一を巡っての各国の国際秩序への思惑の交錯する中でドイツ統一が、現在の東西分断を再び加速させているのではないか。その時のNATO問題が尾を引いているというのを知って、啞然とした。にしても、プーチンの暴挙は暴挙である。

今回「歷程」で野村喜和夫が書いている「魚群探知機」の中に*第三海域（詩の悦び）というのを見つけた。

詩人とは。――詩人とは何か。ほかでもない、詩と格闘する人間である。そうして必ず敗北する存在である。なぜなら、詩とは不可能なるものの謂いであるから。詩人は不可能なるものを夢みる権利を有するにすぎず、詩そのものをわがものとすることはできないのである。（略）

カタストロフへの感覚。（略）

「私」以上のなにか多種多様な生命の結合体。（略）

字数が限られているので一部タイトルを並べたが、詩を書く者にとつては面白い詩人論である。詩と戦う人もいれば詩で戦う人もいて、それは人それぞれだろうが、必ず敗北するもの、というのがいい。詩人は不可能なるものを夢みる権利を有する、というのにもまたいい。みんな悩みながら書いているのだから熊井三郎「むかし パリの一角で」〔軸〕146号）

画家のシルヴァン・ロシニヨールは言った彼は精緻な人物画で名を馳せていた

ピカソ君 君はまだまだだねえ

ちつとも似てないよ

ピカソと呼ばれた男は
ギョロツと目を剥いた

君はカメラのレンズで見
僕は自分の目で見ている
それだけのことだよ

ロシニヨールは面白くなかった
フムと小馬鹿にしたようにつぶけた

ぼくの絵は注文をこなさきれない
君はどうかね

ギョロ目の男は
面倒くさそうに返した

君は他人のために描き
ぼくは自分のために描く
それだけのことだよ

……（略）……

昔パリの街角でそんな会話が交わされなかつたか、と、売れない詩人の、これも妄想で、面白い。

速水晃「一九四五年八月一五日を過ぎて」

〔軸〕146号

7 この道はいつか来た道
アメリカ太平洋艦隊第六軍の陸軍第九八師
団が大阪へ進駐
大阪市東区(現・中央区)の住友生命ビル
に司令部を設置
……(略)……

8 ここはどここの細道じゃ
住吉区杉本町 大阪商科大学の建造物と大
大な敷地
学徒出陣で出払った施設だと海兵隊に強制
攝取され
……(略)……

焼け野原の中、焼け残った鉄筋コンクリー
トの建物、生命保険会社、瓦斯ビル、銀行、
学校などが事務所、将校、家族等の宿舍へと
接取されてゆく様子をよく調べて書いている。

9 ナベナベ底抜け底が抜けたら
日本家屋に特化した油脂焼夷弾を主に使用
一般市民を巻き込んだ無差別な爆撃――
詳細な地図、航空写真を基に分析
上空七〇〇〇～一万メートルの日に爆撃の
作戦は
上空一五〇〇～三〇〇〇メートルの夜間の
焼夷弾爆撃へ転換された

……(略)……

調べ上げた事実をきっちり記録していくこ
とで、人々の知らないことを日の当たるところ
に出していく。彼は必死で詩で戦っている
のである。二度と戦争を起ささないために。
森木林「染師」(Rosa/Kemel) 5号)

そのひとは
とても腕のよい 染師だったそうです

「どうぞあなた 染めてください

わたしのかわりに
天を海を」

銃剣越しに シャツにひろがる
名も知らぬヒトの 温かい紅（紅が）
染師のすべてを染めました

「わたしは もう

なにものも 染めることはできません
どうぞあなた 染めてください

慈しみだけで
大地を 心を」

この人もまた、詩で戦っているのだ。戦争
は嫌だ、平和が大事だなどといわないでも、
氣もちが伝わってくる詩は間違いなく書ける

ということだ

石村勇二「垂矢子」(RIVIERE) 185号)

わたしの父であることを認めようとはしな

い

お前のお父さんの眼差しを振り切って

暗い坂道をもときた闇に帰ろうとしたとき

おまえはわたしを追いかけ 呼びとめたの

だ

(ほんとうのことを知りたいの

(知らないほうがいいことだつてあるさ

(さっき戸の陰で聞いていたの わたしと

あなたどういふ関係になるんですか

(戸籍が正しければ 兄と妹つてことにな

るでしょうね

神社の石段の中腹で二人並んで腰かけた

……(略)……

広大な宇宙に二人だけいるような気がした

(まだ聞きたいか？

(もう怖い

(帰ろうか？

(うん

……(略)……

駄菓子屋でチョコレートを買って 半分こ
して

やって来た乗合自動車に飛び込んで

手を振りながらさよならして別れた 二十
三歳の春

事情はまったく分からないが、情景は切なく伝わってくる。神社の石段以下二人の会話が抜群で、その後の連はむしろいらぬくらいで、乗合自動車に飛び込んで、という所で時代もその時のきもちもよく出ていると思う。切ない気持ちは父も同じだったのであろうか。
井崎外枝子「炉端の風景——父のこと」(「笛」301号)

どうしてだろう なぜだろう
父という字が どこにもない
いくら探しても 見当たらない
父母の会でも 父はおらず
父兄会といっても 兄などおらず
作文にだって 一度も書いたことはない
亡くなったのは
その人 六十歳
十五年も一つ屋根の下に住んでいながら
話した記憶もなく 声さえ覚えていないと
は
……(略)……
町の病院での最後 せまい家での葬式
がんの病巣は 真つ黒な炭のように焼け残った

——あその姉さんは涙も出さなかった！
と聞こえてきた(わたしのことだ)

火の消えかかった炉端
大きな棒切れをもって父に刃向かった
三歳児が母を庇おうとしたのだ
——末恐ろしい子だ
といわれた(本気で遣っ付けようとしたら
しい
そのとき 父という言葉を抹殺し
声さえかき消してしまっただけの
……(略)……

焼け残った真つ黒い塊が、澱のように心に
残る。本当に強いものは、弱いものを傷つけない。この父もまた弱い人間だったのかも知れない。最も弱い三歳の子どもが母を守って父を切り捨てたのだ。勇敢な少女に感動する。そして最終行の「父」という字に 一生付きまとう「斧」が効いている。
吉井淑「抱く」(「Z記」8号)

埋まらなかつたすきまごと
抱いてあげればよかった

三十で亡くなった生母^はを
抱いてあげればよかった
痛んだ胸ごと
抱きしめてあげればよかった
樹を抱きに行く
樺の太い命が流れている
悔しいわたしの穴ほこへ
入ってくる

夜を越えてひとり立っている樹
夜 ひとり立っていたら母たち
抱くという言葉だけで、主人公の生活が十分表現できている。抱いてあげればよかった、抱きしめてあげればよかった、という言葉から複雑な事情も、悲しみもよく伝わってくる、いい詩だ。
美濃千鶴「彼方」(「石ノ森」196号)

テレビ画面の中で
小さな小さな天王星が
巨大な月の影になる
親の背に隠れる幼子のように

かわいいねえ、と八十四歳の母が目を細める

違うんだよお母さん

天王星は月より地球よりずっと大きいんだよ

三十億キロという距離が
本当の姿を見えなくする
巨大なガスと氷の塊は
可憐な星になつて
老いの心を慰める

目に小さく映るものを
小さいと信じて
何が悪いのだろう
近すぎて疑われない
近くても信じられない
家族という日々

……(略)……

天王星はかわいい
そうだね、お母さん

皆既月食、しかも同時に天王星食という数百年に一度の天然ショーを観ている母娘のほほえましい姿。月は最も近くにあるからいつも見える。木星や、ましてや天王星が、知らなければそんなに大きい星だと誰も思わない。

見たものが正しいとは限らないという視点と優しい会話が素敵。

田代久美子「想像力」(「アリエ」211号)

五歳になる末の孫娘が

だっこできるどうぶつは いっぴきに
ひきとかぞえます

ねこは いっぴきにひきと かぞえます
す

蛙は というママの質問に
顔じゅう涙でぬらして声のかぎりに泣くばかり
カエルをだっこするのは想像するだに恐ろしく

答えの得られぬママの形相はもつと恐ろしく
く

……(略)……

孫娘はからだをふるわせ泣きじゃくる
蛇は 甲虫は とママが金切り声で追い打ちをかける

わたしが抱きしめてなだめても
踏ん張る足場がまだ未成熟のまま
孫娘の想像力は奔馬になつて
天翔ける

二連目、人間の想像力は果てしなく豊かな例が、ビッグバンの現場を見ることも可能かも、などと書かれているが、それはなくても、

孫のあどけなき、一生懸命さは十分伝わっている。「孫とベットの詩は書くな」といわれるが、こんな形だと歓迎である。でも、ママ、あんまりからかって遊んではいけませんよ。
崎田きよ子「今日を始める」(「天秤宮Ⅱ」2号)

夜が明けて目が覚めて

布団の温もりの中

そつと自分の両手を胸に抱き

おはよう今日 と小さく呟いてみる

この手で確かに掴んでいた昨日は去り

明日はまだ不確かな未来 だから

これから動き出す今日だけが確かな現実

今度お茶しようね

そんな約束も果たせぬまま

突然 時空を超えた世界へ旅立った友が

あり

もつれた糸を解きほぐす時間さえ奪い

いきなり遠い彼方へと消えた人もいて

誰にも等しい明日は来ないのだと

迷子の私が一人 ウロウロおるおる

……(略)……

さあ 今日を始めよう

明日に続く今日だと言い聞かせながら

……(略)……

確かに、過去は過ぎ去ってしまい、未来は未知。在るのは今だけなのである。悲しみを振り切って、「今日を始めよう」というのは素晴らしいこと。素敵な未来が待っているかも知れませんが。

小舞真理「海」(黄蔷薇) 220号)

まだ朝日が
のぼりきらない
うすあかりの中
海に導かれるように
波うちぎわを歩く

海がめくれて
いちまいの水
くるるらりん
はりるくりる
……(略)……
飛び散るひかり
びるる 水しぶき
……(略)……
身体のかなを
海が通りぬけていく
たぶんあの人のことが
好きだから 一歩ずつ
あけ方の海辺を
どこまでも歩く

これは若い人しか書けない詩だ。こういうのを読むとほっとする。だんだん明けてくる茜色に染まった海辺、水しぶき。ただ一人の人のことを思って歩き続けている。「はりるくりる」はオノマトベとしては少し無理かな。八重洋一郎「危機」(風のたより) 25号)

燃え上がる 燃え上がる 燃え上がる 予
感と不信が燃え上がる
ほのほの中に不安と恐怖が燃え上がる

たった八十年にもならないうちに
第三次世界大戦勃発の緊張張る激しい空気が
弾くとピンピン音がする
地球は血みどろ滾りたち
冷酷無残な
権力者 なおも権力望むのか
人間脳髄抉りすて 奴隷は反応ぐつと埋め
込み 搾取に搾取を続けていくのか
そんな疑問も今やむなし
あらゆる基準が あらゆる価値が
あらゆる倫理が崩れに崩れ すべての形象
がどろどろに正体なくして
崩れに崩れ
事態はどんどん悪くなる
これらはみんな“生物”のその一種
人類衰亡の確かな徴候

……(略)……
真正面から問い続け 耐え続けられ
ほのほの中にいのちのかすかな道が見える
だろう
ほのほの中にほのやかないのちの姿が見える
だろう
……(略)……

怒って嘆いているばかりではない。もちろん、だからこれは人類に対する警告である。しかし、みんな同じように考え、事態を嘆いているとは限らないから。とりあえず、情報に惑わされず、広く見て深く考えよう。

同人誌の詩評であるから、詩について書かねばならないのだが、同人誌のなかにはエッセイを入れている詩誌がたくさんある。以外とエッセイに面白いものがある。

内藤恵子「ゲルハルト・リヒター」(Messiere) 60号)

ゲルハルト・リヒターは、みなさんご存じのようにドイツの現代美術家である。最近、東京・豊田などで展覧会が開かれている。ナチスのユダヤ人虐殺を扱った《ビルケナウ》四部作で評判になっている。実際の写真に絵具を塗り重ねて抽象画にしたものは、事実が隠されているために、さらに観るものの想像力を掻き立てる。

内藤さんは、六十年代ドイツに留学していたため、「ドイツの秋」を扱った《一九七七年十月一日》という、十五点の作品に興味を持ったという。

ドイツ赤軍のテロ行為の残虐さ。その後逮捕された学生たちの獄中での自殺、さらに残党狩り。その後の逮捕者も獄中で集団自殺、といわれるが、そのあたりは闇である。

ドイツという国の難しさ。ナチを産んだ背景。敗戦後、分断された歴史。さらに統一後今も残る格差。そして一部の地域でネオナチを産みだしている現状。歴史をたどれば辿るほど難しさがわかる。

そんな思考の、大変参考になるエッセイであった。

石川逸子「今、いまいげんじ氏の本を紐解く」
「軍属身分で処刑されたBC級戦犯」(「風のたより」25号)

「今、いまいげんじ氏の本を紐解く」はいまいげんじ氏の著書『赤紙兵隊記』と『シベリアの歌』で、満洲で兵役にふくし、敗戦後シベリア抑留生活を三年送ったいまい氏が兵士から見た戦争の実態、シベリア抑留の矛盾などを赤裸々に綴ったものである。

「軍属身分で処刑されたBC級戦犯」には、退役し、軍属でありながら処刑された東京捕虜収容所直江津分所に勤務していた七人の残した手紙などが載せられている。

海軍大臣でありながら東京裁判で、死刑を逃れた者、朝鮮戦争などの特赦で、政界に復帰した者などある中で、彼らの死は何とも痛ましい。「わたしは具になりたい」などもよく知られているBC級裁判である。

石川逸子氏の、太平洋戦争に関して、忍耐強いくいろんな角度から調べ、資料を集め明らかにしている態度に敬意を表して紹介した。

【受贈詩誌】

「葦笛36号」・「ア・テンポ31号」・「あめんすい35号」・「アリゼ211号・212号」・「異郷61号」・「石ノ森196号」・「KAIKA121号」・「SAGA24号」・「風のたより25号」・「黄薔薇220号創刊70周年記念号」・「砕氷船37号」・「軸145号・146号」・「新怪魚150号」・「Z記8号」・「多島海42号」・「玉蘭9号」・「天国飲屋2号」・「天秤宮II2号」・「潮流詩派271号」・「波蝕31号」・「表情31号」・「笛11号」・「プライム55号」・「PO187号」・「ぼとり68号」・「三重詩人260号」・「宮城の現代詩・Messer60号」・「梨翠書9号・10号」・「RIVER18号」・「りんごの木62号」・「歷程612号・613号」・「Kosa-Kame15号」・「栃木県現代詩年鑑・宮城の現代詩」